巻　頭　言

今年は１９９９年、世間ではきたるべき２０００年紀に向けての期待や不安が様々に語られている。その中で私たちの南山短期大学人間関係研究センターも、大きな変革の波に向かって漕ぎだすことになる。我々の教育研究活動の母体である南山短期大学人間関係科が、２０００年４月から南山大学人文学部心理人間学科として新しく船出し、これに合わせて人間関係研究センターも南山大学に移るからである。

思い返せば人間関係科の創設は１９７３年。南山短期大学が学科の新設に当たってコンサルテーションを依頼したＪＩＣＥ（立教大学キリスト教教育研究所：所長柳原光）は、自らの貯えたラボラトリー方式の体験学習に関する知識と経験と人材とを惜しみなくつぎ込んで、体験学習方式による授業を展開する日本で最初の大学をこの世に送り出した。様々な分野から集まったスタッフは、ラボラトリー方式の体験学習を大学のカリキュラムとしてどう実現するかという課題に全力を上げて取り組んだ。

スタッフの活動は意欲的で、学科の開設から５年目の１９７７年９月には早くも社会人を対象にした研究講座を開くための人間関係研究センターを開設した。当時の副学長大庭征露は、医学部の教授が大学での教育活動と大学病院での臨床活動との両立を通して腕を上げてすばらしい研究成果を挙げるのと同様に、生きた人間関係を研究する人間関係科のスタッフにとっても大学内での活動だけでなく社会現場とつながる研究の場が必要であると意義付けて、センターの活動を積極的に支援した。

センターの研究紀要『人間関係』第一号が発刊されたのが１９８４年。毎号の紀要には、センターが毎年開催してきた特別研究会の講演記録、特集論文や投稿論文、ミニレクチャーなどを掲載し、内容的に非常にユニークな研究紀要として研究者はもとより実践家の方々からも強い関心を持っていただいてきたと自負している。

論文の多くは、われわれが平素取り組んでいる体験的な授業実践や研究活動の中から生まれたものであり、単なる研究のための研究ではなかったことがすばらしい事であった。この紀要を母体として、南山短期大学人間関係科の監修による『人間関係トレーニング』（ナカニシヤ出版、1992）を出版できたことも、われわれの活動にとっての大きな記念碑であったといえる。

来年度からは「南山大学人間関係研究センター」として新しい組織と運営方針を持つことになるが、これまでわれわれが築き上げてきた歴史の上に、さらに豊かな可能性を広げていくことができるように願っている。

分け入っても分け入っても青い山　（ 種田山頭火 ）

山　口　真　人